

# St. Luke's International University Repository

## 第11回国際がん看護学術集会参加報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 外崎, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/400">http://hdl.handle.net/10285/400</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 国際学会・セミナー参加報告

### 1. 国際協力事業団「ケニヤ共和国医療技術教育強化プロジェクト」での協働活動

国際協力事業団「ケニヤ共和国医療技術教育強化プロジェクト」はナイロビにある Kenya Medical Training College (KMTC) の16学部を持つ本校を対象に1998年3月から技術協力が開始されている。KMTCはケニヤのコメディカルの95%を養成している教育機関で、ナイロビ本校にある地域看護学部(保健婦・助産婦・看護婦統合カリキュラム)を含め16学部をもっている。日本側協力機関として国立公衆衛生院・国際医療福祉大学が中心となり、チーフアドバイザー、看護学部、保健記録情報学、栄養学に長期専門家を派遣し、また、臨床医学、環境保健科学、医学教育学にも協力対象として活動している。加えて、ケニヤ全土に広がる分校の中堅教員にも10週間の研修を援助している。

2000年度はカリキュラム改善をテーマに研修会が8月14日から10月4日まで開催され、本報告者は研修会の講師の一人として8月8日から9月4日まで「看護カリキュラム改善に関わる技術指導」の任を得て、ケニヤ共和国の首都ナイロビに短期派遣された。研修会ではカリキュラム開発過程の「カリキュラムデザイン」と「科目概要と教授内容」に関する講義・演習を担当した。また、特別講義として「日本の健康相移行に応じた看護カリキュラムの開発」を行った。研修は朝の祈りから始まり、30名若の中堅教員の取り組みは熱心で、英語で講義することを除いて何の違和感もなく活動させていただいた。

滞在中は、さらにケニヤ国の健康及び看護教育状況の概況、及びケニヤ国内の現地視察の機会を得た。地方を回り、女性の経済自立を目指す農業支援プロジェクトあるいは苗木づくり支援プロジェクトや社会林業プロジェクト視察と広く健康・看護プロジェクトと有機的に働くべきプロジェクトについても視察させていただいた。ケニヤも早魃にそして政治的不安定さ、経済格差に住民が苦悩している状況と、同時にケニヤの観光資源となっている自然と野生の動物たちを目の当たりにし、違いと共通する経験を共有するグローバルネットワークの重要性を考えさせられた。アフリカは日本からは遠い存在であるが、「全ての人の健康」(Health for All)を指向するWHO看護開発センターのメンバーとして可能で効果的協働活動を発展させてゆければと考える。

(研究法：田代順子)

### 2. 第11回国際がん看護学術集会(11th International Conference on Cancer Care 2000, Oslo)参加報告

2000年7月31日～8月3日ノルウェーの首都オスロで第11回国際がん看護学術集会が開催された。本学からはミセス・セントジョン記念教育基金の助成を受け小松教授とともに参加し、口演では「Development of a questionnaire to measure treat levels for Japanese adult undergoing hematopoietic stem-cell transplant」を発表(外崎)し、示説では文部省科学研究費(基盤研究A;研究代表者・小松浩子)「がんデイケアモデル開発のための実証的研究」の経過報告を「An innovative approach to caring for cancer patients in Japan」と題して行った。

本学会は「Building Bridges for the Future」をメインテーマとし、全体会では各地域からがん看護とがん予防における今後の看護プログラムについて報告がなされた。がんは来世紀においても人類の健康上の大きな問題として引き続き取り組むべき課題であるが、「経済的状況や教育レベル、がん予防知識の普及状況」、「がん予防に関与できる看護スタッフのマンパワー」、「各国の医療保険制度と予防対策との関係」、「都市化、自然破壊などの環境的変化と発ガン物質への暴露の危険性」などのそれぞれの状況が各地域により異なり、地域性を考慮した取り組みの必要性を再確認できた。特に開発途上国におけるがん予防は手つかずの部分が多く、わが国は経済的支援のみならず看護においてもこれまでの知見を提供し、支援していくべき責務があることが今学会への参加を通じて感じられた。

(成人看護学：外崎明子)

### 3. 国際遺伝看護学会(International Society of Nursing in Genetics: ISONG 2000 Education Conference)参加報告

国際遺伝看護学会(ISONG)への参加は、2回目となる。今年は、2000年10月2～3日にアメリカ・フィラデルフィアで開催された。この学会に引き続きアメリカ人類遺伝学会(The American Society of Human Genetics: ASHG)にも参加している。こちらは、Geneticに関わるあらゆる分野の人が集まる大規模な学会である。ISONGの参加者は100名